

# 坂 尻 遺 跡

—平成2年度メロンハウス建設に伴う緊急発掘調査概報—

1 9 9 1

静岡県袋井市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、国庫補助金・県費補助金を得て、袋井市教育委員会が行った版尻遺跡発掘調査概報—平成2年度メロンハウス建設に伴う緊急発掘調査概報—である。
- 2 調査は吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）を発掘担当者とし、早川保子を調査補助員として、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
- 3 出土遺物のうち、土器墨書の釈文は原秀三郎先生（静岡大学人文学部教授）の、また下駄材の同定は橋本貞紀夫氏（バリノ・サーヴェイ株式会社研究所研究員）による。
- 4 本書の執筆・編集は吉岡が行った。掲載した挿図のトレースはすべて早川が行い、写真図版は吉岡・早川が協力して作成した。
- 5 本発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。
- 6 調査及び本概報の発刊に係わる事務は、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が担当した。

## 目 次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 1 調査にいたる経過          | 1  |
| 2 立 地               | 2  |
| 3 発掘調査の方法・経過・調査整理体制 | 2  |
| 4 基 本 層 位           | 5  |
| 5 古墳時代の遺構 出土土器      | 5  |
| 6 奈良時代の遺構 出土土器      | 16 |
| 7 平安時代以降の遺構 出土土器    | 19 |
| 8 包含層出土土器 その他の遺物    | 28 |
| 9 ま と め             | 31 |

## 挿 図 目 次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 第1図 坂尻遺跡位置図 周辺遺跡分布図           | 1  |
| 第2図 第1面全体図                    | 7  |
| 第3図 第3面全体図                    | 9  |
| 第4図 1・2・3号住居実測図               | 11 |
| 第5図 4・5・6・7号住居実測図             | 12 |
| 第6図 1・2・3・4・5号竪穴実測図           | 15 |
| 第7図 1・2号掘立実測図                 | 17 |
| 第8図 1号井戸実測図                   | 19 |
| 第9図 1・2・3・4号住居出土土器実測図         | 20 |
| 第10図 5・6・7・8号住居 1・2号竪穴出土土器実測図 | 21 |
| 第11図 3・4号竪穴出土土器実測図            | 22 |
| 第12図 4号竪穴 柱穴出土土器実測図           | 23 |
| 第13図 1号掘立 柱穴 1号溝出土土器実測図       | 24 |
| 第14図 5号竪穴 1号井戸出土土器・下駄実測図      | 25 |
| 第15図 包含層出土土器実測図(1)            | 26 |
| 第16図 包含層出土土器実測図(2)            | 27 |
| 第17図 包含層出土土器実測図(3)            | 28 |
| 第18図 土製品 木製品 鉄製品 石製品実測図       | 30 |

## 表 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1表 平成2年度検出遺構一覧表 | 32 |
|------------------|----|

## 図 版 目 次

|      |               |                 |
|------|---------------|-----------------|
| 図版1  | 第1面完掘状況       | 第2面完掘状況         |
| 図版2  | 第3面完掘状況       | 第3面北半完掘状況       |
| 図版3  | 第3面南半完掘状況     | 1・2号住居 2号竪穴     |
| 図版4  | 3号住居          | 4号住居            |
| 図版5  | 5号住居          | 4号竪穴            |
| 図版6  | 1号掘立          | 2号掘立 1号溝        |
| 図版7  | 1号掘立P62柱根検出状況 | 1号掘立P65根固め環検出状況 |
| 図版8  | 5号竪穴          | 第1面小柱穴列         |
| 図版9  | 第1面溝          | 1号井戸下駄出土状況      |
| 図版10 | 柱根            | 礎板              |

# 平成2年度坂尻遺跡発掘調査概報

## 1 調査にいたる経過

地主杉村忠一氏から坂尻遺跡範囲内におけるメロンハウス増築の計画を伺ったのは平成元年11月である。袋井市教育委員会は計画域が奈良時代の遺構群（佐野郡家）の中心域にあたるため、事前の記録保存の必要性を痛感したが、発掘調査を実施するには2つの大きな障壁があった。1つは遅くとも7月当初からハウスの建築に取りかからなければ、秋の暖房時期までに完



第1図 坂尻遺跡位置図 周辺遺跡分布（『静岡県埋文研1989』より加筆・転載）

成せず、メロン一作分を放棄していただかなければならないこと。現地発掘調査期間は4月当初開始としても3ヶ月弱しかなく、調査対象面積約800㎡（のべ面積2400㎡以上）に対し、あまりにも短すぎると判断されたためである。いま1つの障壁は包含層が厚く、ハウスの基礎が及ぶ高さより、発掘時1m以上深くなり、発掘により攪拌された粘土質の包含層を埋め戻すだけでは、地盤がハウスの重量に耐えられないと予想されたためである。坂尻遺跡の重要性を認識しつつも、発掘調査の実施には大きな危険性が伴うと考えられた。袋井市教育委員会はこの2つの障壁について静岡県教育委員会と現地の立会いも含め数度の協議を行った。深さの問題は発掘後、調査により掘り下げた高さまで礫を含んだ山土により埋め戻すことで地主の了解を得た。ともすれば消極的になりがちな雰囲気の中、静岡県教育委員会文化課からの積極的な働きかけ、励ましがあり、平成2年度国・県費の補助事業として事前の記録保存（発掘調査）に努めることとなった。

## 2 立 地

遠く赤石山系に源を発し南流する原野谷川は、小笠山丘陵にぶつかって河道を西へ転ずる。この河道転換点付近は、西流してきた逆川・垂木川が近接し、合流する地点でもある。

坂尻遺跡は原野谷川の河道転換点西側に形成された自然堤防上から西側緩斜面（標高15～17.5m）にかけて立地する。自然堤防は北に迫った丘陵末端へ連続し、後背低地との比高差は平均3mである。現在確認されている遺跡範囲は約15haと广大で、奈良時代の遺構群は南東半約6haに及んでいる。今回の発掘調査地点はこの奈良時代遺構分布域のほぼ中心に位置している。

原野谷川・逆川・垂木川が形成した自然堤防上に初めて人々が住みついたのは弥生時代中期と考えられる（原川遺跡）。後期にいたり、集落数（国本Ⅱ・梅橋北・三ツ池・曾我領家遺跡）は増加する。坂尻遺跡では古墳時代前期に集落が成立し、後期初頭になるとその規模は四方へ拡大する。この集落拡大期と軌を一にして、北方丘陵の縁辺部にも小規模な集落（不入斗・石ノ形遺跡）が営まれるようになる。後期後半には坂尻遺跡に、周溝を持ち掘立柱建物を主体とする拠点集落が成立し、それを取り囲むように堅穴住居群数単位からなる小集落が分布する。坂尻遺跡はこれら古墳時代後期の遺跡群のほぼ中央に位置し、表面採集が可能な遺物の分布範囲は著しく広い。

## 3 発掘調査の方法・経過・調査整理体制

### 1) 方 法

発掘調査区に一边10mの方形グリッド（大グリッド）を任意に設定した。西から東へ、また北南・北南の順でA・B・C……G・H区と呼び、さらに大グリッドを4分割（一边5m）して小グリッドとした（北西→南西→北東→南東の順にa・b・c・d区と呼んだ）。分層発掘・掘り下げは大グリッド単位で行い、小グリッドは包含層出土遺物の取り上げ、現地図面作成等の基本単位である。南北軸はN-4°00'-Wに設定した。

調査区全面の遺構確認はⅢa層上面（Ⅱ層除去後 第1面）、及びⅢb層上面（第2面）、Ⅳ

層上面(Ⅲb層除去後 第3面)にて、それぞれ行った。遺構は検出順に001・002……(柱穴状遺構はP1・P2……)と通し番号を付して呼び、各検出面ごとに100分の1縮尺の略測図を作成して、出土遺物を混同しないよう努めた。

現地平面図・断面図は20分の1縮尺を基本とし、全体図は第1～3面の検出面それぞれにおいて、やり方方式により作成した。遺物の出土状態等詳細な図面が必要な場合は、10分の1縮尺図を作成した。

記録写真はブローニーサイズ原画(白黒)と35mmサイズ原画(白黒・カラーリバーサル)を併用した。

## ii) 経 過

4月19日～27日 発掘用具・資材を搬入し、19日、四周の排水溝の掘削から現地作業を開始する。東から西へ向かいⅡ層上面における遺構確認作業・排水溝を利用して土層断面の観察を行う。Ⅱ層上面では井戸(001)を除き遺構が認められないことからⅡ層を掘り下げることにする。Ⅱ層に含まれる遺物は多くない。23日よりベルトコンベアー・発電機を導入。

5月7日～11日 Ⅱ層を除去し、東から西へ大グリッド単位で遺構確認作業を行う。井戸北側でⅡ層内に含まれる集礎、畑に係わると思われる溝・小柱穴列を検出。

5月14日～18日 Ⅱ層を除去。Ⅲ層上面における遺構検出作業を完了。遺構の発掘に集中する。並行して実測用のやり方を設置。井戸001を約30cm程掘り深めたところで、17日、第1面の完了全体写真撮影。18日、遺構実測作業。

5月22日～25日 22日から作業員を増員し、Ⅲa層の掘り下げ開始。東から大グリッド単位で遺構検出作業を行う。井戸(001)の発掘継続。E区付近で大規模な掘り方(1号掘立)が見つかり、一部発掘を行う。24日、Ⅲb層上面(第2面)における遺構検出作業完了。発掘区西半ではⅢa・b層の識別が難しく、遺構の輪郭を明瞭に捉えきれない。Ⅲa層から多量の土師器・須恵器片が出土。25日、井戸から下駄が出土する。

5月28日～6月1日 1号掘立を中心に第2面検出の遺構発掘を継続、完了。1日、第2面の完了全体写真、1号掘立等遺構部分写真を撮影。早速実測作業の準備にとりかかる。

6月4日・5日 早朝より夜間まで遺構実測作業。5日、雨中の実測となりマイラーペーパーを使用する。

6月6日～8日 6日からⅢb層の掘り下げを開始するが、田植え作業が始まり、作業員数激減。作業は遅々として進まなくなる。また除去したⅢa層が予想より多く、埴土置場が無くなったため、発掘区西側4m分を先行して発掘し、そこに埴土を置くことにする。

6月11日～15日 11日、4m分の遺構検出、発掘作業完了。写真撮影の後、12日、実測作業。13日からⅢb層の掘り下げを行う。Ⅲa層に比べ土器片の出土量は多くない。

- 6月18日～22日 18日から作業員を増員し、一気にⅢb層の掘り下げ、Ⅳ層上面（第3面）における遺構検出作業を急ぐ。発掘区全域に竪穴住居群、1・2号掘立をはじめ、多くの遺構が分布することを確認。21日から遺構発掘に集中する。
- 6月25日～29日 25日、井戸の断面図作成。27日、第3面を完掘し、全体写真・遺構部分写真を撮影。28日から全体図・4号竪穴詳細図の作成に取りかかる。
- 6月30日 第3面の全体図作成完了。
- 7月1日～6日 竪穴住居の竈を切断。25日、竈断面図を作成。あわせて4号竪穴の遺物の取り上げ作業を行う。2号掘立の柱根検出状況図を作成後、掘り方内すべての柱根・礎板等を取り除く。
- 7月9日～12日 9日から発掘区の埋め戻し開始。埋め戻し作業と並行して、発掘調査区にめぐらした土止め板・杭の撤去を行う。11・12日、発掘用具・資材を文化財資料室へ片づけ、現地発掘作業のすべてを終了した。

### iii) 調査整理体制

発掘調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅井通男

社会教育課長 岩崎 保

文化振興係長 小粥保夫

主 査 吉岡伸夫（発掘担当者）

主任学芸員 永井義博 加藤理文（静岡県教育委員会文化課）

学 芸 員 松井一明 森井雅彦 白澤 崇

主 任 主 事 建部千代子

鈴木寿美子 寺田妙子

調 査 補 助 員 早川保子

発 掘 作 業 員 加藤喜一 兼子肇 木村拓 高橋邦夫 高橋四郎 松村

宏 村松啓一 加藤博司 山本修 岡山よし子 松村と

し 山木つき 寺田松枝 寺田秀雄 杉山兼一 田中清

子 加藤友平 樽松一男 榊原熊四 澤田与茂治 杉山

良一 鈴木喜康 袴田静夫 萩田秀一 平出範吉 諸井

貞平 門名静夫 荒木ひさ子 安間しげ子 池ヶ谷京子

石黒みの 鈴木いし子 高橋きょう 永田のぶ枝 堀田

きよ 高橋康治 石川澄子 鈴木健蔵 鈴木真一 高野

秀雄 寺田博 山田勝彦 鈴木きみ子 鈴木敏子

資 料 整 理 員 平賀明美 近藤よしの 鈴木知美 早川幸子

#### 4 基本層位

版灰遺跡における奈良時代の遺構は、国道1号線を北側の、県道掛川袋井線を西側の限界とし、ほぼ東西250m、南北250mの範囲内に集中することが明らかとなってきている。平成2年度の発掘調査地点は、この遺構分布域の中心部分にあたる。

当調査区の基本層位を上層より列記すれば次のとおりである。

- I層 暗灰色粘土(耕作土) 層厚20~30cm 最下に黄褐色を呈する水田床土がある。
- II層 菅鉄・若干のマンガン粒混じり灰色粘土 層厚10~15cm 古墳・奈良時代の遺物も認められるが、基本的に平安時代以降の遺物包含層・遺構覆土と考えている。II層を除去した後の遺構確認面を第1面とした。
- III層 マンガン粒混じり暗灰色微砂質粘土 層厚40~60cm マンガン粒の多少によりa・bの2層に細分される。マンガン粒の顕著なIII a層は一見茶褐色を呈し、古墳・奈良時代の遺物包含層。炭化物の混入したIII a層が、この時期の遺構の主体的な覆土となる。III a層除去面を第2面としたが、第2面においては1・2号掘立柱建物以外、明確な遺構は捉えられなかった。多くの遺構がIII b層を掘り下げた後(第3面)に検出される。土器片の包含量はIII a層に顕著である。
- IV層 粘性の強い灰白色粘土あるいは緑灰色・暗青灰色粘土またはこれらの互層。無遺物。

#### 5 古墳時代の遺構 出土土器

平成2年度の発掘調査により検出された古墳時代の遺構には、竪穴住居8棟・竪穴状遺構2ヶ所の他、多くの溝・柱穴等がある。

##### 1) 竪穴住居

1号住居(第4図) 東西幅5.7m 南北幅5.5m 検出面からの深さ10~15cm 平面方形 棟方位N-20°00'-Wをなす。4支柱構造と考えられ、不明瞭ながら北壁のほぼ中央に竈を持つ。壁溝は見られない。炭火物を含むIII a層を覆土とし、2号住居に切断される。1・2号住居のどちらに伴ったものか、その出土状況から識別は困難であるが、出土土器には須恵器杯蓋・杯身・長頸壺ないしフラスコ瓶の口縁部片、土師器杯身・高杯・短頸壺・台付壺等がある。

2号住居(第4図) 東西幅5.1m 南北幅5.5m 深さ15cm 平面方形 棟方位N-3°00'-Wをなす。北壁の東寄りに築かれた竈が1号住居の覆土を切断しており、新旧関係は明確である。4支柱構造と考えられ、東壁から南壁にかけて壁溝が認められる。1号住居と同様、炭化物を含んだ均一なIII a層を覆土とする。

出土土器(第9図1~15) 1・2号住居出土土器は2大別される。半球状をなし口縁部の横ナデ痕と指頭圧痕が目立つ土師器杯身(4~6)、顕著なシボリ目と裾に屈曲部を持つ高杯脚(8)、縦位のヘラ削りを加えた高杯脚(9)、上げ底様ないし口縁直下に幅広の突帯をめぐらした広口短頸壺(13・14)等からなる土器群と須恵器杯蓋・杯身・フラスコ瓶口縁部片等の土器群である。4・6は平底様を呈する。同じく平底の壺底部片(12)や7・10・11の高杯脚、

15の台付蓋等がどちらの土器群に属するものかよく判らない。須恵器杯身(2)は最大径11.4cm、器高3.9cmを測り、川江編年(川江1979)第Ⅲ期後葉から末葉(陶器窯TK209~217併行期)に比定できる。住居の新旧関係に従い、廻る1号住居を6世紀前葉以前に、2号住居を6世紀末から7世紀初頭頃に位置づけておきたい。

3号住居(第4図) 東西幅6.35m 南北幅5.7m 検出面からの深さ15cm 平面方形 棟方位N-17°00'-Wを呈し、1号住居と平行している。東西の柱間が広い4主柱構造をなし、南西隅を除き壁溝が認められる。北壁のはほぼ中央に竈を築いていた。南壁の束苅り、壁溝が途切れるヶ所は入り口と推定でき、そこから幅70cm前後のスロープが住居内に伸びていた。炭火物を含む均一なⅢa層を焼土とする。出土土器には須恵器杯蓋・杯身、土師器杯蓋・杯身・高杯・壺・甕等がある。

出土土器(第9図16~30) 16・19の須恵器杯蓋は入り口スロープ近くのP229及び北壁を掘り込んでいたP256からの出土品であり、重複していた遺構の時期の異なる土器が混在していた可能性がある。半球状をなし天井部の約2分の1を凹転へう削り整形した杯蓋(16)をはじめ、須恵器杯類の多くは川江編年第Ⅲ期後葉から末葉に比定でき、土師器に比べその編年時期は降るものと思われる。木葉痕を残す底部片は東側壁溝内に落ち込んでいた。

22はいわゆる須恵器模倣杯蓋、丸底で口縁端部を先細く仕上げた土師器杯身(23・24)は1号住居に伴った5の杯身とよく似ている。頸口縁部片(29・30)は幅広く横ナデ調整を加え、端部をつまみ上げており、若干時期の降る器形を呈している。頸片は須恵器杯類に伴うものと判断される。口縁部を外反させた土師器杯身(25)や杯部に稜を持つ高杯(26)には5世紀代の形態を見ることができるが、須恵器模倣杯蓋が出土している点、6世紀前葉の器種組成と考えるのが妥当であろう。

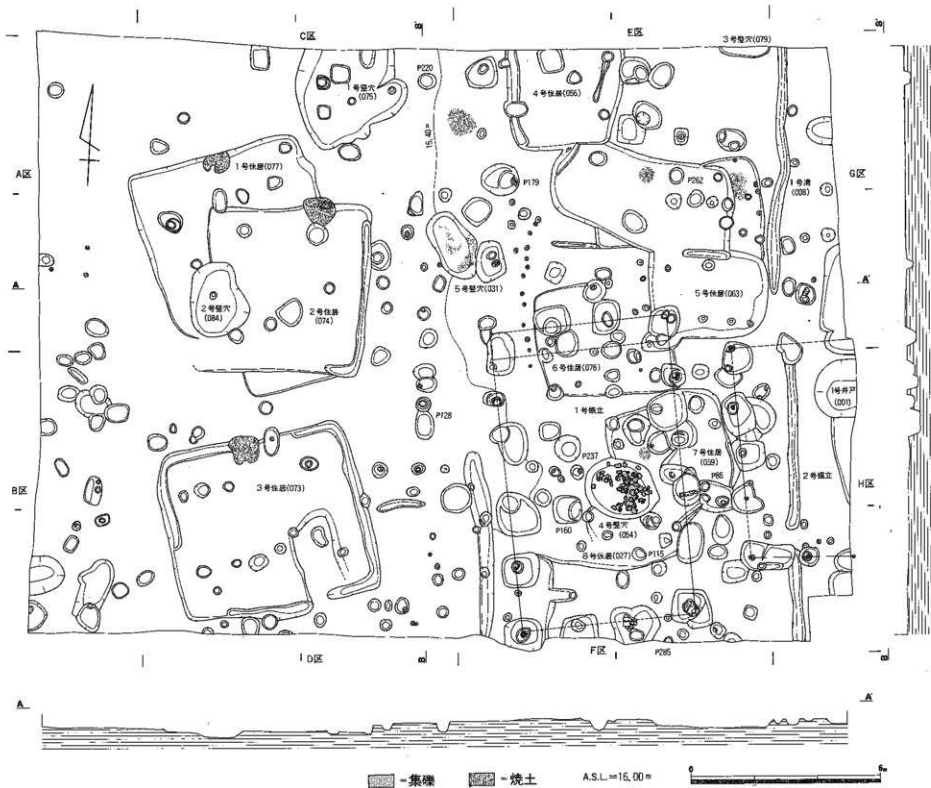
4号住居(第5図) 北端は調査区外にあり未発掘。東西幅3.75m 南北幅3.1m以上 検出面からの深さ20cm 棟方位N-5°30'-Wをなす。平面形は割の張った方形を呈する。西側の柱穴が壁と重複しているが、4主柱構造と思われる。竈は見られない。炭火物・焼土を含んだⅢa層を覆土とする。出土土器には須恵器杯蓋、土師器杯身・高杯脚部片がある。

出土土器(第9図31~35) 須恵器杯蓋は細片ながら、川江編年第Ⅲ期末葉に比定できる。35は酒杯状の杯部を有する高杯と思われ、須恵器模倣杯身(32)の立ちあがりは高い。6世紀末から7世紀初頭の土器群と考えられる。

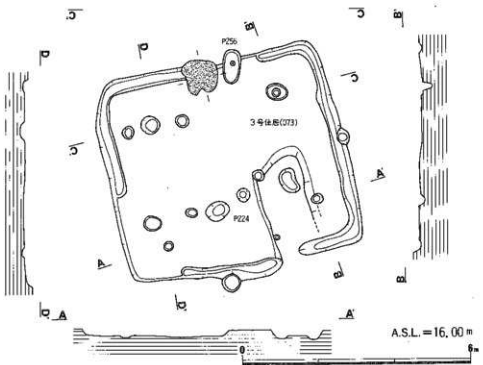
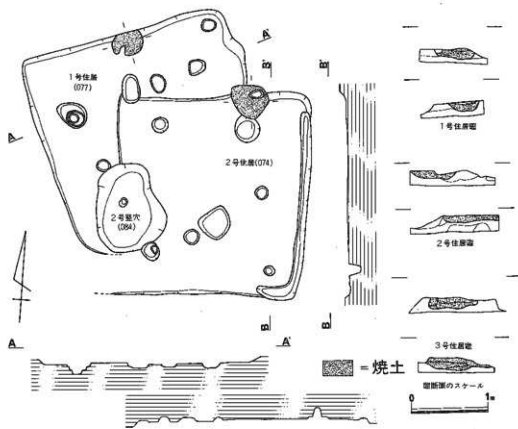
5号住居(第5図) 東西幅3.70m 南北幅2.8m 検出面からの深さ20~25cm 棟方位N-3°00'-Wをなす。平面形は壁に腰らみを持ち、東西に長い隅丸長方形を呈する。北壁の一部に壁溝状の落ち込みが認められたが明瞭でない。柱穴は小さく、並びも不規則である。焼土・竈は見られない。炭火物・焼土を含んだ均一なⅢa層を覆土とし、6号住居を切断している。覆土に含まれていた須恵器・土師器片の多くは著しい小破片であり、器形を知りえたのは須恵器杯蓋1点のみである。

出土土器(第10図36・37) 須恵器杯蓋(36)は最大径10.5cm 器高4.5cmを測る。天井頂部を狭くへう削り整形し、肥厚した口縁端部は内彎する。川江編年第Ⅲ期末葉に比定でき、6世

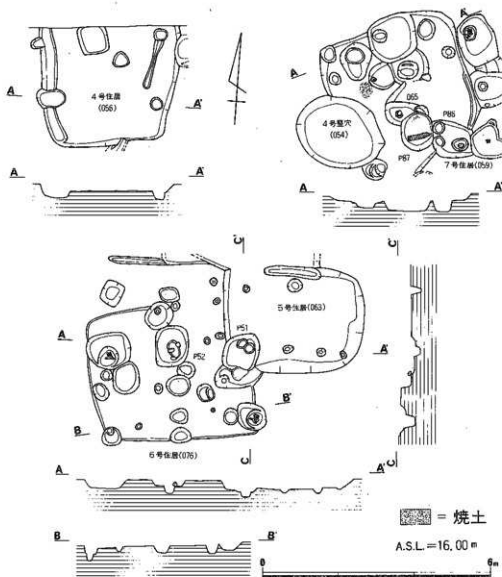




第3面全体图



第4図 1・2・3号住居実測図



第5図 4・5・6・7号住居実測図

紀末から7世紀初頭に位置づけられる。37の須恵器壺肩部片(?)にはカキ目が見られる。  
**6号住居**(第5図) 東西幅4.2m 南北幅3.55m 検出面からの深さ5~10cm 平面方形  
 棟方位N-10°00'-Wをなす。柱の配置は不明瞭であり、壁溝・焼土・竈等は見られない。  
 炭火物を含んだ重a層を主体的な覆土とするが、5号住居との識別は容易である。土師器小片  
 の他、須恵器杯蓋が1点出土している。

**出土土器**(第10図38) 38の須恵器杯蓋は、天井部の約3分の2を回転へう削り整形し、口縁  
 部との境に稜を持つ。口縁端部を丸く仕上げ、最大径12.7cmと若干小ぶりではあるが、川江編  
 年Ⅱ期(陶邑窯MT15・TK10併行期)の資料と考えられ、6世紀前半に位置づけられる。

7号住居(第5図) 東西幅3.7m 南北幅3.6m前後 検出面からの深さ10~20cm 平面若くは隅の張った方形 棟方位N-23°00'-Wをなす。北壁近くの2柱穴は明瞭であり、4主柱構造と推定される。奈良時代の掘立柱建物(1号堀立)や土器晩集坑(4号竪穴)の他、多くの柱穴に切断されているため断定できないが、竈・壁溝は見られない。床面の北西寄りに焼土(径35~45cm)が認められる。炭化物を含んだⅢa層を主体的な覆土とし、出土土器には須恵器杯身、土師器杯身・高杯・長頸壺・甕・甔等がある。

出土土器(第10図39~48) 須恵器杯身(39)は著しい小片で、最大径の復元は困難である。立ち上がり端部は凹曲気味に内傾し、川江編年第Ⅱ期に属すると判断される。須恵器模倣杯身(40)の立ち上がりは長く、ほぼ垂直に立ち、一見川江編年第Ⅰ期(陶器窯TK47併行期以前)の須恵器を模したように見える。41の半球状の土師器杯身は平底様を呈し、大きく裾を広げた脚部を杯部にはめ込んだ高杯(42・43)にはナデ、削り痕が顕著である。甕(46)は口縁部をくの字状に外反させ、甔(47・48)はすべて口縁部を肥厚させる。土師器長頸壺(44)が伴っているものの、6世紀前半の器種組成の一端を示していると考えている。

8号住居(第3図) 西北東の壁は検出されず、平面形またその規模も明らかでない。南壁と思われる立ち上がりは明瞭で、その北側にはし字形に並ぶほぼ同規模の柱穴3ヶ所が確認できる。一応4主柱構造の竪穴住居と判断した。重複する7号住居との覆土の識別は困難である。南壁近くから土師器杯身・甕・甔片等が出土している。

出土土器(第10図49~52) 半球状をなす49の土師器杯身の口縁部はわずかに内彎し、古い形態を残している。杯身・甕共に口縁部を幅広く横ナデ調整する。体部外面をていねいにへう磨き放射状暗文を加えた盤状の甕(51)は、他の土師器に比べ時期の降る資料であり、重複する4号竪穴に伴っていたものかもしれない。6世紀前半の竪穴住居と判断している。

その他B区付近から平面方形様、不定形を呈するⅢa層の落ち込み、数ヶ所の焼土等が検出されており、4~6号住居と重複してさらに数棟の竪穴住居が築かれていた可能性が高い。

## ii) 竪穴状遺構

1号竪穴(第6図) 長径3.4m 短径3m以上 検出面からの深さ15cm 平面不定形をなす。北端は調査区外に及ぶ。柱穴状の落ち込みが大小6ヶ所認められ、竪穴住居を推定したものとも考えられる。炭化物・灰白色粘土塊を含むⅢa層を覆土とし、底面に接して、須恵器杯身、土師器底部片が出土している。

出土土器(第10図53~55) 須恵器杯身(53)は最大径14cm 器高5.1cmを測り、底部の約5分の4を回転へう削り整形する。立ち上がり端部は凹曲気味に鋭く内傾する。木葉痕を残す小さな上げ底様の甕(54)と伴出している点を考慮し、53の杯身は川江編年第Ⅰ期(陶器窯TK47併行期)に属するものと考えておきたい。5世紀末から6世紀初頭の竪穴状遺構と考えられる。肥厚する口縁に横位のハケメを加えた甕(55)は竪穴内の柱穴状の落ち込みP240から出上しており、別の遺構に伴っていた可能性がある。

2号竪穴(第6図) 長径2.3m 短径1.85m 検出面からの深さ10~15cm 平面隅円形 主軸方位N-10°00'-Wをなす。平坦な底面に1ヶ所認められた柱穴状の落ち込みは、重複す

る1・2号住居に伴うものと考えられる。粘性の強い緑灰色・灰白色粘土を覆土とし、集中しないが、須恵器杯蓋・無蓋高杯の他、土師器杯身・高杯・甕等比較的多くの土師器片が混在していた。

**出土土器（第10図56～63）** 須恵器杯蓋（56）は最大径12.1cm、器高4.3cmを測り、天井部と口縁部との境の稜は明瞭である。天井部の約3分の2を回転ヘラ削り整形し、口縁端部は段化し始めている。5条の櫛描波状文を施した無蓋高杯（57）と共に、川江編年第1期（陶邑窯TK23・47併行期）に比定され、6世紀までは降らない資料と判断している。口縁部を外反させた59の上師器杯身は焼津市宮之腰遺跡相模場（焼津市教委1982）出土品のなかに見ることができ、いわゆる宮之腰1式（増井1964）に属する器形である。高杯（60）の杯部の段は明瞭で、58の杯身内面にはいねいな磨きが施されている。口縁端部を肥厚させた壺（61・62）、くの字状の短い口縁部を持つ甕（63）共に、顕著なヨコナデ・ハケメ痕を残す。5世紀末葉の器種組成の一端を示す土器群である。

**3号整穴（第6図）** 幅1.6m以上 深さ5～10cm 炭化物を含んだⅢa層の明確な落ち込みであるが、大半が調査区外にあり、詳細はよくわからない。土師器高杯片のみ1点出土している。

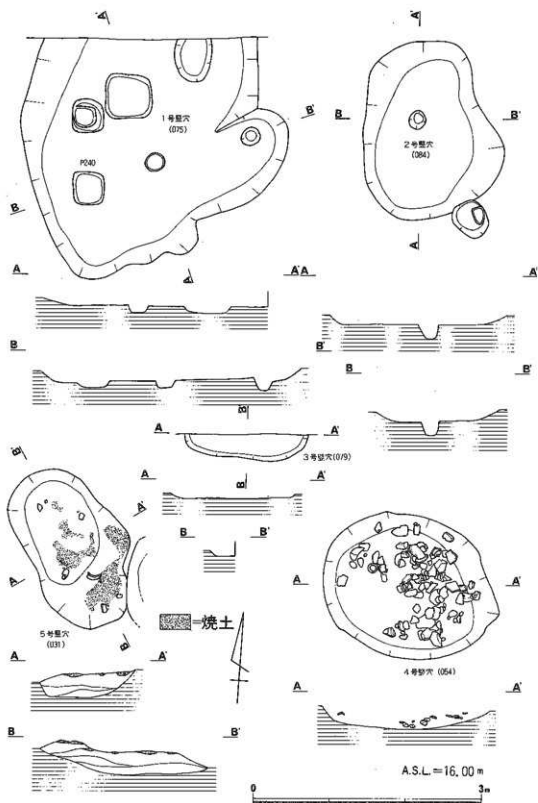
**出土土器（第11図64）** 口縁部を外反させた半球状の杯部を持つ。ハの字状に開く短い脚を輪接合した6世紀代の高杯と考えられる。

**4号整穴（第6図）** 長径2.2m 短径1.35m 検出面からの深さ30cm 平面楕円形 主軸方位N-79° 30'-Wをなす。すり鉢状を呈する整穴内に多量の礫と土器片の集積が認められた。礫・土器片共、整穴の中央ではほぼ底面に接していたが、周縁部になると5～15cm浮いているものが多い。また集積に疎密が見られ、いくつかの塊を構成していた。炭化物・焼土塊を含んだⅢa層を覆土とする。土器廃棄坑と考えているが、整穴内離れて出土した破片どうしが接合し、完形品が目立つ須恵器杯類とは対照的に、大形品（須恵器広口壺・土師器甕等）の多くが捨てられる前にすでに破砕されていたと判断される。また完形品に復元できた大形品は無い。出土土器の器種組成は、須恵器杯蓋3点・杯身2点・高杯1点・すり鉢1点・広口壺1点・土師器壺2点以上・鉢1点・甕8点以上・台付甕1点・甕1点以上である。他に土師が1点出土している。

**出土土器（第11図65～83 第12図84・85）** 須恵器杯類はヘラ切り雕しの後、ほとんど調整を行っていない（65～69）。川江編年第IV期前半（陶邑窯TK217併行期）に比定でき、杯蓋・杯身が逆転する直前の資料と考えられる。すり鉢（72）には細い2孔が穿たれている。土師器壺は平底を呈し、木葉痕を残す人形品（74）がある。甕には口縁部をくの字状に外反させ先細く仕上げたもの（80）も認められるが、大半が口縁端部をつまみ上げ、最大径はむしろ口徑にある（81）。口縁部の横ナデ調整は幅広く、頸部にまで及んでいる。甕（84）は単純口縁でバケツ状を呈する。7世紀前葉から中葉の器種組成を示す良好な土器群である。

### III) 柱穴状遺構（第3図）

古墳時代に属すると思われる柱穴が200数10ヶ所検出されている。規模には大小が見られる



第6图 1·2·3·4·5号壁穴实测图

が、平面は総じて円・楕円形を呈し、Ⅲa層を覆土とする。土師器杯身や甕が出土したDc区P128・Fd区P115等は単なる柱穴とは考えられず、Fd区P285は明らかに須恵器甕を1個体のみ納めるために掘られた小穴と判断される。

**出土土器**（第12図86～97） P220から出土した87の土師器が杯身ではなく、6世紀代に顕著となる短脚を輪接合した高杯の杯部片であるとすれば、伴出した須恵器杯身（86）、須恵器横紋杯蓋（88）から見て、新羅種出現期の資料と考えられる。P128出土品（89～91）は90の杯身が平底縁を呈するものの、6世紀後半に位置づけられる。P285から単独出土した須恵器大型甕（92）は最大径17.5cmを測り、口縁部を意図的に打ち欠いている。頸部に17条単位の横波状文を施す。体部の文様帯は上下に沈線を加えた2条の突帯により区画され、波状文と同一施文具による刺突文列を有する。体部下半の調整は叩きの後回転ナデ、底部は手持ちのナデにより整形される。川江編年第I期（陶邑窯TK208併行期以前）に比定され、当地域における初源期の須恵器である。P115からはほぼ完形品となる土師器杯身の5点が出土している。半球状をなし口縁部を若干内彎させるもの（96・97）と口縁部を屈曲・外反させるもの（93～95）の2形態が見られ、両者とも平底を呈する。94・95の杯身には屈曲部にへら状具による沈線が加えられる。野田市見性寺貝塚（平野1974）出土品と類似した器形・組成を示し、また須恵器が伴わない点、5世紀前半に比定可能な好資料である。

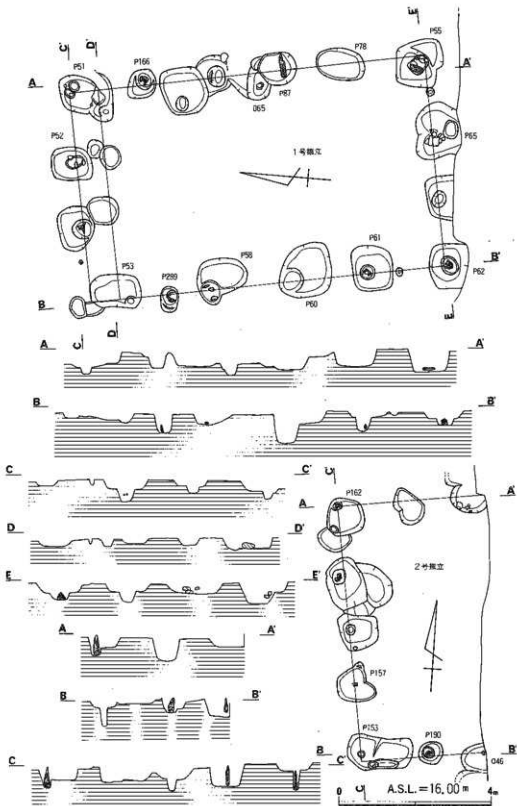
## 6 奈良時代の遺構 出土土器

奈良時代の遺構には、掘立柱建物2棟・竪穴状遺構・溝・柱穴等がある。

### 1) 掘立柱建物

**1号掘立**（第7図） 間口3間（5.55m） 奥行5間（9.40m） 棟方位N-10°00' -Wをなす。側柱のみからなり、掘り方は平面隅丸方形様を呈する。掘り方規模は1辺90～150cmと大形で、大半が柱部分を2段に掘り込んでいた。柱間には長短が見られるが、対面する側柱どうしはほぼ対応している。P52・55・58等にこぶし大鎌を用いた根固め跡が確認でき、P55ではさらにその上にみかん割りした柱材を転用して礎板を敷いていた。P87の礎板は60cm前後に切断された柱をそのまま用いている。北東の隅柱には礎石を思わせる盤状の礎が、また4ヶ所の掘り方内に柱根が残っていた。柱根は芯が抜け、著しく腐食していたが、径26～30cmを測り、一部樹皮を残している。北面の側柱から約80cm内側に1条柱穴列が認められ、建て直しを行ったものとも考えられる。炭化物を含んだⅢa層と灰色粘土が互層を形成し、埋め土の状況は明瞭である。覆土中に含まれていた奈良時代の土器片には、須恵器杯蓋・有台杯身・無台杯身・盤、土師器無台杯身・甕等がある。

**出土土器**（第13図98～130） 須恵器杯蓋には身受け部が内方まで明瞭に屈曲しない奈良時代前葉の形態（98・101・115・120等）が比較的多く認められるが、一方最大径が小さく天井の低い明らかに後葉の破片（106・124）も含まれている。有台杯身・無台杯身においても、杯蓋と同様、底部中央が高台より下方へ張り出す（129）、また杓状を呈する（104）前葉の形態と盤状をなす（100・107）後葉の形態が共に見られる。116の無台杯身の底部には糸切り痕が明瞭



第7图 1·2号独立实测图

に残り、口縁端部を外反させた117の杯身は、浜松市伊場遺跡の編年（川江1980）において、後葉の基準資料とされた金属器模倣のC類土器である。龍の口縁部には高低差がある。

土師器無台杯身（109・110）は盤状をなし、横ナデ調整が発達している。放射状暗文を加えた111の杯身はいわゆる甲斐型杯と思われ、白褐色を呈する胎土も、他の土師器と大きく異っている。甕（112・113）の口縁部はコの字状に水平近く開き、時期の降る器形を示す。

平安時代以降の土器が一切認められない以上、1号掘立の建築時期は奈良時代後葉とするのが妥当である。

**2号掘立（第7図）** 東半が発掘区外にあり、全形は明らかでない。間口2柱間以上（3.8m）奥行4柱間（6.7m）棟方位N-9°00'-Wをなす。側柱のみからなる建物と思われる。掘り方は隅丸方形様（1辺1m前後）を呈し、1号掘立同様2段に掘られたものが多いが、2段目の規模は柱の径よりわずかに大きな程度である。北面の間柱に1ヶ所根固め礎が認められた他、礎板等は見られない。5ヶ所の掘り方に径15~20cmの柱根が残っていた。埋め土はⅢa層・灰白色粘土・緑灰色粘土の互層からなる。覆土中に含まれていた土器片はすべて古墳時代に属する土師器細片であったが、1号掘立と棟方位が一致し、またはほぼ同一の掘り方規模・柱間尺を有することから、同時期に併存していた掘立柱建物と考えている。

他に平面隅丸方形様を呈し、奈良時代と思われる柱穴がE区に認められたが、まとまりを持たない。1・2号掘立と重複するP86・160から時期の遡る土師器甕（131）及び須恵器皿片（132）が出土している。

## ii) 溝

**1号溝（第3図）** G a区からH b区にかけて発掘区を南北に横切る小溝である。途切れているが、本来は直線的に連続していたと考えられる。幅30~40cm 深さ15~20cm 断面U状をなす。炭化物を含んだⅢa層を覆土とし、2号掘立を切断していた。溝内から須恵器杯蓋・無台杯身・長頸甕、土師器杯身・甕等が出土している。

**出土土器（第13図133~143）** 先細い身受け部を段を介して外下方へ伸はず134の須恵器杯蓋は奈良時代前葉の資料である。底部を下方へ張り出した138の杯身は盤状の無台杯身出現期の形態を示す。141の土師器杯身は半球状を呈し、古墳時代に属するものかもしれない。杯蓋（133・135）のつまみは小形で背が高く、無台杯身が目立つ。頸部から外反し始め、口縁部を水平に開く土師器甕（142）は後葉の器形である。139の無台杯身底面には墨書が認められ、「赤染」〔釋カ〕と読める。前葉の土器片を含んでいるが、2号掘立を切断している点、奈良時代後葉の比較的短期間、機能していた溝と考えられる。

他に1号掘立の西側に隣接し、南北に伸びる小溝は奈良時代に属する可能性がある。

## ii) 堅穴状遺構

**5号堅穴（第6図）** 長径2.4m 短径1.9m 深さ30cm 主軸方位N-33°30'-Wをなす。西縁には明確な壁を持つが、縦断面に壁・底部の境は見られない。一見自然の窪地のようにも見える。炭化物を多量に含んだⅢa層・灰・灰色粘土がレンズ状を呈して重なり、盛り上がった上向に焼土層が認められる。この焼土層は火を焚いた跡ではなく、灰色粘土塊が混じる焼土塊

の集まりである。おそらく他所から運ばれてきた炭・灰・焼土等を廃棄した跡と思われる。灰色粘土・焼土層には小礫と共に、多くの土師器壺小片、須恵器杯蓋片が混在していた。

**出土土器**（第14図144～146） 出土土器の大半は土師器甕胴部の細片である。薄手で比較的小さいハケメを加える。須恵器杯蓋（144～146）は背が低く、身受け部を内方まで屈曲させており、すべて奈良時代後葉に位置づけられる。

## 7 平安時代以降の遺構 出土土器

平安時代以降の遺構には、井戸1基の他、小柱穴列・溝等がある。

### i) 井戸

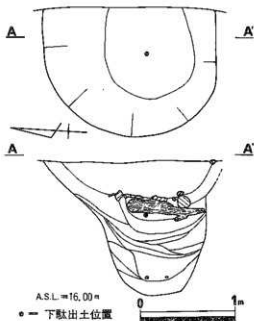
**1号井戸**（第8図） 径1.85m 深さ1.4m 東縁を確認していないが、平面円形を呈する。北壁が2段に掘り込まれ、井戸枠は抜き取られている。レンズ状をなす黒色有機質土・粘性の強い灰白色粘土・緑灰色粘土を主体的な覆土とし、薄層も認められる。人為的な埋め戻し、自然の埋没、また掘削をくり返していたらしい。深部からの出土遺物は無いが、検出面から深さ80cmに達する新たな掘り込みが認められ、その内に溜った黒色有機質土中から、多量の礫・自然木・樹皮・炭化材に混じって、青磁片・山茶碗・鉢・下駄等が出土している。

**出土土器**（第14図147～156） 高い高台を持ち、口唇部の引きが強い148は12世紀前半に位置づけられる。高台に砂目を残す149も同様12世紀前半に比定でき、在地産（大須賀町滑ヶ谷窯）の可能性ある。ひしゃげた高台の端部に鈎板のある150～152の一群は12世紀中頃から後半の資料と思われる。155は淡青色を呈する青磁片。153・154はおそらく高台を有する小甕であろう。

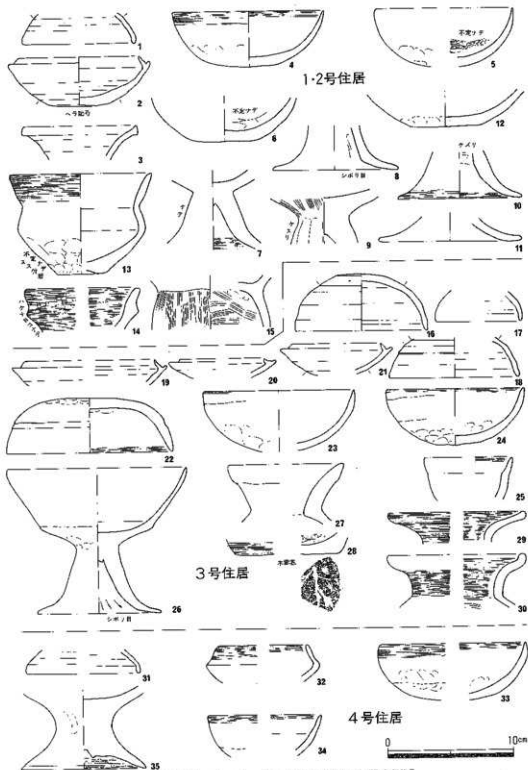
1号井戸の埋没時期は12世紀の中頃から後半と考えられる。

### ii) 小柱穴列（第2図）

第1面において、南北、東西方向に伸びる3条の小柱穴列を確認した。規模の大きなものも認められるが、大半が径20～30cm 深さ15～30cmを割り、平坦な底面を持つ。いわゆる先の尖った杭の打ち込み跡とは考えられない。黒色有機質土・炭化物を含んだII層を覆土とする。出土遺物が無く、時期またその性格も特定できないが、後述する溝と関連し、畑の耕作に係わる遺構ではないかと考えている。

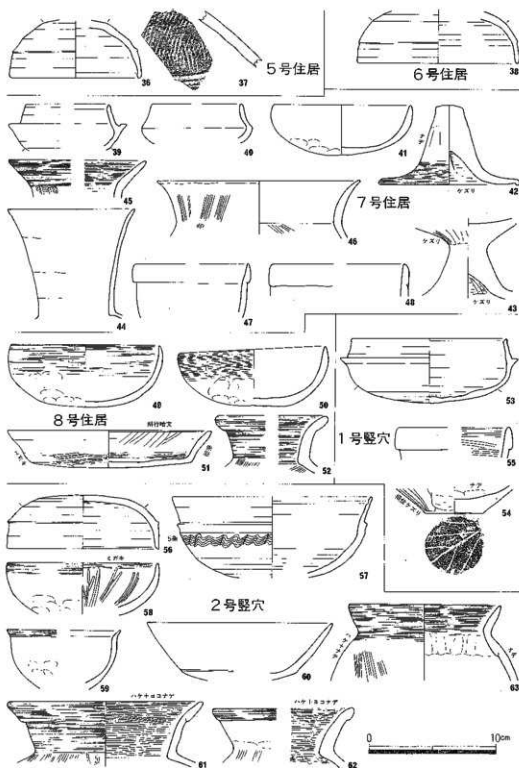


第8図 1号井戸穴測図



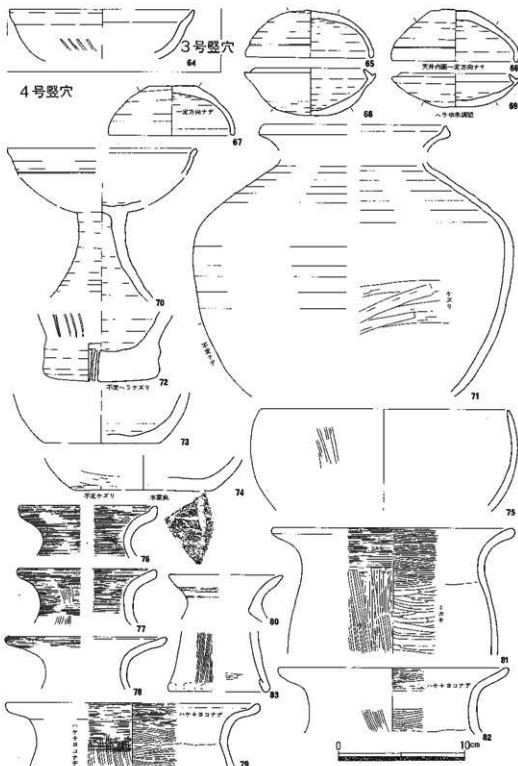
第9図 1・2・3・4号住居出土土器実測図

2・9・11・1号住居 1・12・14・15・2号住居 3・8・10・13・2号住居  
 17・18・20・27・29・30・3号住居 16・19・3号住居住穴 (P256・224)  
 28・3号住居壁溝 31・35・4号住居



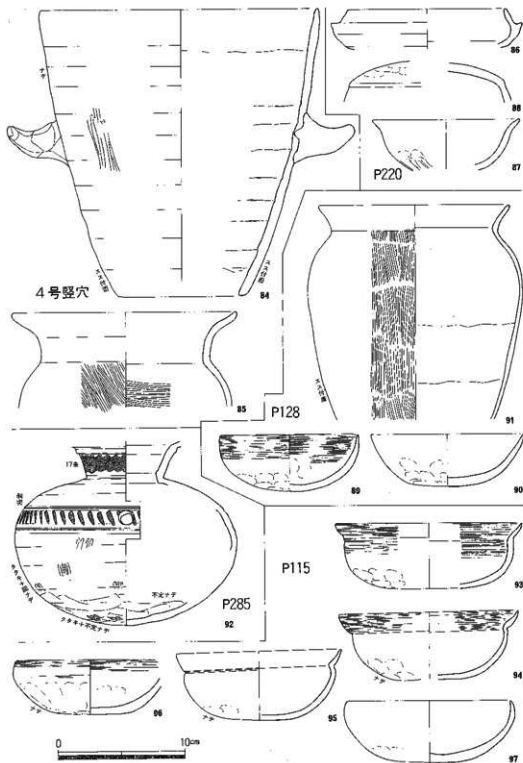
第10図 5・6・7・8号住居 1・2号竪穴出土土器実測図

36・37 5号住居 38 6号住居 39~48 7号住居 49・51・52 8号住居 50 8号住居柱穴 (P237)  
53・54 1号竪穴 55 1号竪穴柱穴 (P240) 56~63 2号竪穴



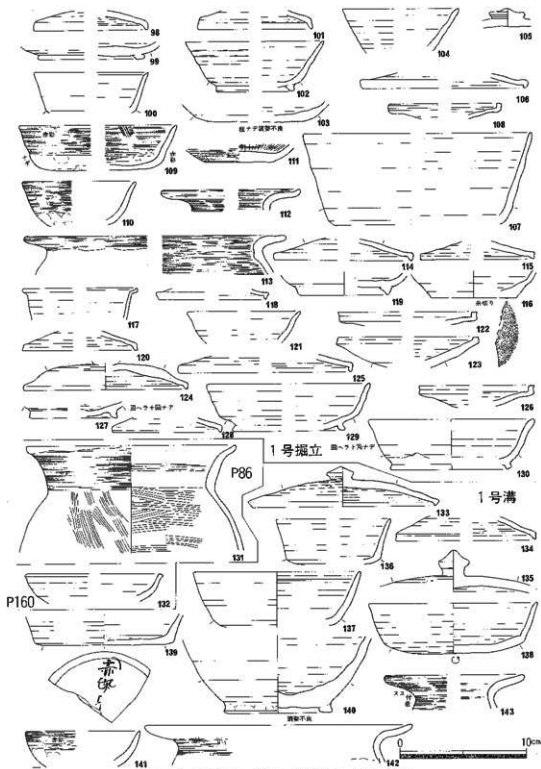
第11図 3・4号堅穴出土土器実測図

64 3号堅穴 65~83 4号堅穴



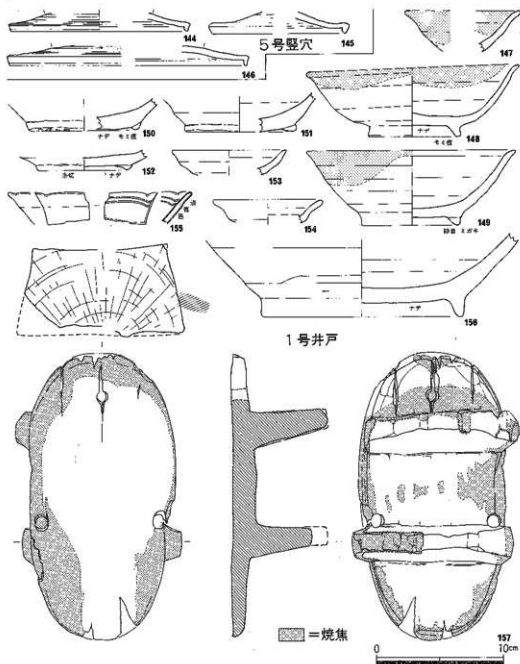
第12图 4号竖穴 柱穴出土土器実測図

84・85 4号竖穴 86~88 P220 89~91 P128 92 P285 93~97 P115



第13図 1号掘立 柱穴 1号溝出土土器実測図

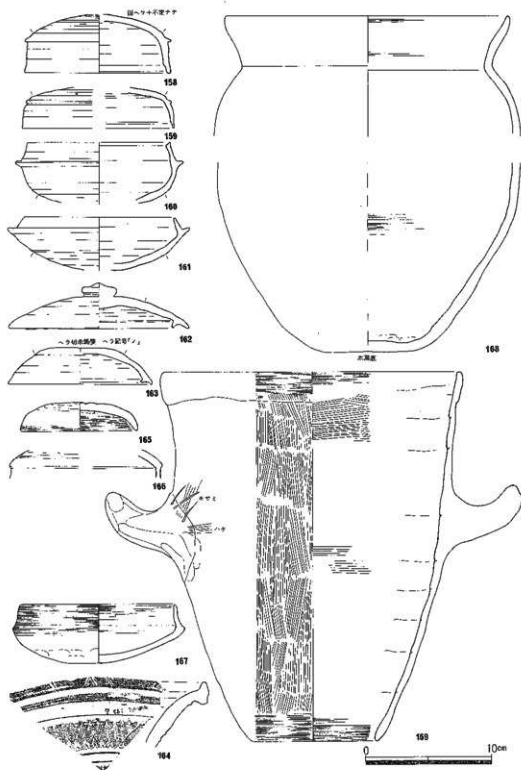
98~130 1号掘立 (98~100 P 55 101~103 P 78 104 P 87 105 0 65 106~113 P 51  
 114~116 P 52 117 P 53 118・119 P 58 120~123 P 60 124~126 P 61 127 P 62  
 128~130 P 65) 131 P 86 132 P 160 133~143 1号溝



第14図 5号竖穴 1号井戸出土土器・下駄実測図  
144～146 5号竖穴 147～157 1号井戸

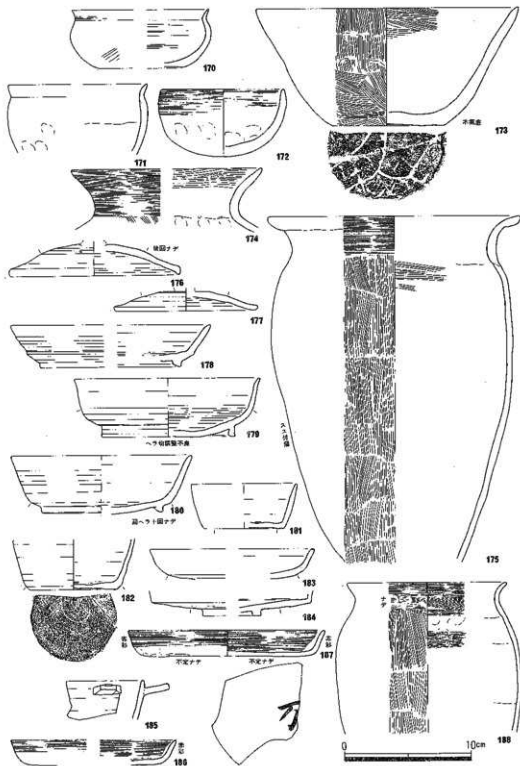
### iii) 溝 (第2図)

第1面において小柱穴列と共に検出された。東西、南北に走る3条の溝がある。幅35～50cm 深さ5～20cm 壁の傾斜は総じて緩やかである。南北方位の2条は平行し、東寄りの溝の南端



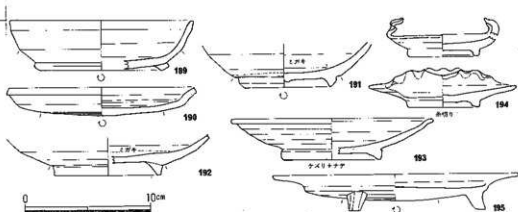
第15図 包含層出土土器実測図(1)

158 D b 区 III a 層 160 C a 区 III a 層 161 B c 区 III a 層 162 F a 区 III a 層  
 166 E c 区 III a 層 168 G a 区 III a 層



第16図 包含層出土器大測図(2)

- 171・172 E d 区 III a 層 173 F d 区 III a 層 175 D c 区 III 層 176 G b・H a 区 III a 層  
 177・181 E d 区 III a 層 179 E a 区 III a 層 182 E b・d 区 III a 層 183・184 C a 区 III a 層  
 185 E a・b 区 III a 層 186 F c 区 III a 層 187 E b 区 III a 層



第17図 包含層出土土器実測図(3)

193H b区Ⅲa層 194G b区Ⅲa層

は東方へ屈曲する。また枝溝が伸びている。炭化物の混じったⅡ層を覆土とし、出土遺物は無い。畑周縁の窪地が残存したものと考えている。

Ⅱ層掘り下げ時にG b区から礫・焼土の集積が検出されたが、その時期・性格はよくわからない。

## 8 包含層出土土器 その他の遺物

### i) 包含層出土土器 (第15図158~169 第16図170~188 第17図189~195)

Ⅲ a 層からポリコンテナ約10箱を数える多量の上器片が出土しているが、大半が摩耗した細片で器形を知りえた資料は少ない。遺構出土品に見られなかった器形には、川江編年第四期(陶器窯TK217併行期以降)に比定される身蓋が逆転した7世紀中頃の須恵器杯蓋(162・163)、波状文を持つ甕(164)、土師器壺蓋(165)、木炭底の鉢(173)、奈良時代に属する身受けが消失した須恵器杯蓋(177)、有台皿(184)等がある。158の杯蓋は天井部の広い範囲に回転へう削り調整を加え、一見5世紀代まで通るように見えるが、厚手で、口縁端部に丸味のある段を有する等、6世紀前半代の技法も認められる。188の土師器壺は古墳、奈良時代を通して見られる器形である。土師器皿(187)の底部には「万」の墨書が記されていた。あるいは「万呂」かもしれない。

G b区からH b区にかけてのⅢ a 層中から灰釉陶器が数点出土している。黒笹K14号窯期の耳皿(194)、黒笹K90号窯期の三足盤(195)は良品である。耳皿の底部には糸切り痕が残る、三足盤の足ははいねいにへう削りされる。整った三ヶ月高台を持つ碗(191)、皿(193)も、三足盤同様、黒笹K90号窯期に比定され、192は折戸53号窯期の碗と思われる。192の碗は地元大須賀町清ヶ谷窯の焼成品、他は猿投窯座であろうか。189・190の須恵器有台杯身と皿がこれらの灰釉陶器と共に出土している。肉厚で、胎土は灰白色を呈する。包含層出土品であるため断定できないが、黒笹K14・90号窯期の須恵器の可能性はある。189はあるいは蓋なのかもしれない。

## ii) その他の遺物

その他の遺物にはミニチュア土器・土鍾・土製支脚等の土製品、刀子・鎌等の鉄製品、紡錘車・管玉・砥石等の石製品、柱根等がある。

**ミニチュア土器**（第18図1～5） 瓶型をなす1は北側の排水溝掘削時にⅢ層の比較的下位から出土したものである。背が低く尻つぼみで、時期の遅る器形を呈している。口縁部に顕著な接合痕を残し、指頭圧痕が目立つ。2の杯も粘土紐を巻き上げ、口縁部に横ナデ・指頭ナデを加える。3～5は壺型の手捏土器である。3・5は口縁部を短く外反させ、4では直立する。すべてⅢ層出土品であり断定できないが、古墳時代に属するものと考えている。

**土鍾**（第18図6～13） 完形品で長さ3.5～6.9cm 重量は2.5g前後の小形品（12・13）と10～12gの中形品（8～11）、24g以上を測る大形品（6）に3大別される。23は上半を欠失しているものの23.1gを測る。すべて土師質である。接合痕は認められず、おそらく長く伸ばした粘土塊に棒を差し込み穿孔したものであろう。大形品には指頭ナデが目立つが、小形品の表面調整はいいである。8は7世紀前半から中葉に位置づけられた4号壺穴出土品、他はⅢa層から出土している。

**土製支脚**（第18図14） 14は5号住居北隣りのⅢa層中から出土したものである。推定径6.5cm前後 赤褐色を呈し、砂・礫を多量に含んでいる。縦位のナデ痕が観察できる。他にC区・Eb区のⅢa層中から細片が出土している。

**刀子**（第18図15） 現存長7.3cm 両関づくりである。7世紀代に比定される。

**鎌**（第18図16） 現存長6cm 尖根鎌と考えているが、切先近くの断面が明瞭な方形をなし断定できない。

**鎌**（第18図17） 刃幅3.4cm 一端が屈曲しており鎌基部の破片と思われる。

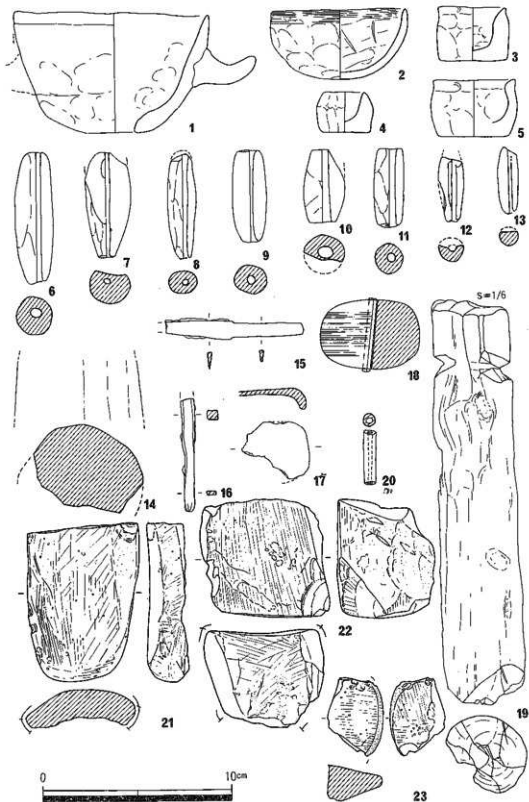
**紡錘車**（第18図18） 最大径5.2cm 厚さ3.6cm 木製 材質は現在同定中である。平面円形、断面は整った楕円形を呈する。中央を穿孔し、わずかにゆがむが木製の芯を残している。一応紡錘車と判断した。Da区Ⅲa層から出土し、時期は特定できない。

**下駄**（第14図157） 長さ22.8cm 幅11.5cm 高さ7.5cm 一木作り 焼けており周縁部は炭火している。平面長円形を呈し、先細くまた裾広に割り出された高い歯を持つ。円形の前緒穴はほぼ中央にあけられている。材質は樺（Zelkova serrata）、伴出した灰釉陶器から見て、12世紀の下駄と判断される。

**礎板**（第18図19 図版10） 1号掘立P87に残っていた柱材を転用した礎板である。長さ63.5cm 太さ13cm 両端を斧状工具により四角から切断し、一方に同じく斧状工具を用い左右を刻んだ縄かけ溝を残している。材質は現在同定中である。樹皮は認められないが、表面調整はほとんど行われていない。

**柱根**（図版10） 1・2号掘立から出土した。1号掘立の柱根は太く（径15～30cm）、芯の抜けたものがある。材質は現在同定中である。一端に斧状工具による切断痕をわずかに残すものも認められるが、著しく腐食し、切断面、表面調整の状況はよくわからない。

**管玉**（第18図20） 長さ2.8cm 径6mm 質は悪いが碧玉製と思われる。両側から穿孔し、端部



第18图 土製品 木製品 鉄製品 石製品実測図

2 Db区Ⅲa層 4 Ha区Ⅲa層 5 Fd区Ⅲa層 6 Fa区Ⅲa層 7 P262 8 4号堅穴  
 9 Fc区Ⅲa層 10 Fd区Ⅲa層 11 号掘立 (P52) 12 Bc区Ⅲa層 13 Dc区Ⅲa層  
 14 Ed区Ⅲ層 15 Fb区Ⅲa層 18 Da区Ⅲa層 19 1号掘立 (P87) 23 Gb区・Ed区Ⅲa層

に顕著な磨き日を残す。

砥石(第18図21~23) すべて凝灰岩製と思われる。裏面が剥落しているため断定できないが、21は扁平な自然石の片面のみを使用し、使用面に膜らみを持つ。22は厚手の砥石で、4面に使用痕が認められる。上面は凹曲する。23を含め小形品が3点出土している。

## 9 ま と め

平成2年度の発掘調査により検出された遺構群を整理すれば第1表のとおりである。以下本発掘調査の成果を列記しまとめたい。

### i) 竪穴住居群について

検出された8棟の竪穴住居のうち、棟方位がほぼ一致し、出土土器の近似する1・3・6号住居と2・4・5号住居は、それぞれ併存していたと考えられる。前者は6世紀前半に比定でき、近接する2棟の中型住居(竪穴規模31~36㎡ 1・3号住居)と小型住居(15㎡ 6号住居)1棟からなる。6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる後者では、1棟の中型住居(28㎡ 2号住居)の東側に、小型住居(10~12㎡ 4・5号住居)が2棟、等間隔で並んでいた。わずかに小規模となる他、平面形態、その構造に大差は見られない。後者の住居群には数棟の掘立柱建物が併存していた可能性がある。

中型の1~3号住居のみ北壁に竈を有していた。竈の構造は明瞭でないが、廻る1号住居では竪穴外にまで及んでいない。また1・3号住居とほぼ同時期に営まれていたと考えられる7号住居に竈は認められず、断定できないものの、西寄りの床面から炉と思われる焼土が検出されている。住居の性格の違いによるものかもしれないが、破片で見えるかぎり1・7号住居の竈はすでに長胴化しており、竈・炉の併存は興味深い現象である。かつて浜松市伊場遺跡の6世紀初頭(陶器窯TK47併行期)の竪穴住居群から竈と3本の土製支脚を用いた竈状施設が確認された(浜松市教委1987)以外、遠江における竈導入期の集落の調査例は皆無に近い。現在調査中の掛川市六ノ坪遺跡では5世紀代まで遡る竪穴住居に竈が認められるとのことであるが、本調査検出の竪穴住居群は、竈導入期の数少ない資料と言える。

### ii) 掘立柱建物について

300余ヶ所に及ぶ柱穴遺構の内、組合せか確認できたのは奈良時代後半に比定できた1・2号掘立のみである。灰土遺跡において現在までに検出された50数棟の掘立柱建物に比べ、著しく大きな建物というわけではないが、掘り方の規模、30cmを測る柱根の太さは過去最大である。庇等は認められず、側柱のみからなる構造ではあるが、L字形に配置されている点、またその位置から考えて、佐野郡家の中心施設の一角に建てられていた掘立柱建物とも考えられる。

### iii) 出土土器について

P115から出土した土師器は当地域における須恵器出現以前の杯類の組成の一端を示していると思われる。口縁部を外反させる杯身は磐田市見性寺貝塚(平野1974)に認められるが、梶

※ 前田庄一氏の教示による。

第1表 平成2年度検出遺構一覧表

## 竪穴住居

(単位cm)

| 名称   | 平面形 | 東西幅 | 南北幅   | 深さ    | 棟方位        | 柱穴数 | 時期      | 備考                 |
|------|-----|-----|-------|-------|------------|-----|---------|--------------------|
| 1号住居 | 方形  | 570 | (550) | 10~15 | N-20°00'-W | 6   | 6C前半    | 竪(北壁)              |
| 2号住居 | 方形  | 510 | 550   | 15    | N-3°00'-W  | 7   | 6C末~7C初 | 竪(北壁)壁溝 1号住居を切断する  |
| 3号住居 | 方形  | 635 | 570   | 20    | N-17°00'-W | 15  | 6C前半    | 竪(北壁)壁溝 入口施設(スロープ) |
| 4号住居 | 方形様 | 375 | 310<  | 20    | N-5°30'-W  | 7   | 6C末~7C初 | 壁溝                 |
| 5号住居 | 方形様 | 370 | 280   | 20~25 | N-3°00'-W  | 5   | 6C末~7C初 | 壁溝 6号住居を切断する       |
| 6号住居 | 方形  | 420 | 355   | 5~10  | N-10°00'-W | 15  | 6C前半    |                    |
| 7号住居 | 方形  | 370 | (360) | 10~20 | N-23°00'-W | 6   | 6C前半    | 焼土                 |
| 8号住居 | -   | -   | -     | 15~20 | -          | 3   | 6C前半    |                    |

## 掘立柱建物

(単位cm)

| 名称   | 間口      |                      | 奥行    |                                | 棟方位        | 掘り方<br>平面形 | 時期   | 備考                  |
|------|---------|----------------------|-------|--------------------------------|------------|------------|------|---------------------|
|      | 柱間実長    | 柱間尺                  | 柱間実長  | 柱間尺                            |            |            |      |                     |
| 1号掘立 | 3 555   | 北 6.5 6.6<br>南 5 6.5 | 5 940 | 東 6.5 6.5 6.5<br>西 3.5 6.5 7.1 | N-10°00'-W | 隅丸方形様      | 8C後半 | 柱根4 礎石3<br>礎石1 礎石の礎 |
| 2号掘立 | 2< 390< | 6.5                  | 4 670 | 6.5 6.5                        | N-9°00'-W  | 隅丸方形様      | 8C後半 | 柱根5 礎石の礎            |

## 竪穴炊爨竈

(単位cm)

| 名称   | 長径   | 短径   | 深さ    | 平面形 | 主軸方位       | 時期     | 備考        |
|------|------|------|-------|-----|------------|--------|-----------|
| 1号竪穴 | 340  | 300< | 15    | 不定形 | ?          | 6C初    |           |
| 2号竪穴 | 230  | 185  | 10~15 | 楕円形 | N-10°00'-W | 5C末    |           |
| 3号竪穴 | 160< | ?    | 5~10  | ?   | ?          | 6C     |           |
| 4号竪穴 | 220  | 135  | 30    | 楕円形 | N-79°30'-W | 7C前~中葉 | 7号住居を切断する |
| 5号竪穴 | 240  | 190  | 30    | 楕円形 | N-33°30'-W | 8C後半   |           |

## 井戸

(単位cm)

| 名称   | 長辺幅 | 短辺幅  | 深さ  | 平面形 | 主軸方位 | 時期   | 備考 |
|------|-----|------|-----|-----|------|------|----|
| 1号井戸 | 186 | 135< | 140 | 円形  | ?    | 12世紀 |    |

※ 掘立柱建物については南北面を間口、東西面を奥行とした。棟方位は奥行の方向である。柱間尺は天平尺(1尺≒30cm)を用い、間口では西から東へ、奥行では北から南の順で記してある。

炊の形態は見られない。見性寺例は上げ底気味の平底を呈し、口縁部の外反する度合も大きく趣を異にしている。また袋井市幕ヶ谷遺跡(磐田市立郷土館1982)から陶器窯TK208併行期の須恵器と共に採集された杯身の外反する口縁部は著しく退化・短くなっており、ほぼ同時期の焼

津市宮之腰遺跡相模場（焼津市教委1982）出土品と類似した器形を呈している。宮之腰遺跡ではむしろ甕位のへう削りを加えた平底（上げ底様）の碗状杯が主体となっていることを考慮すれば、P115出土品は見性寺貝塚と幕ヶ谷、宮之腰遺跡の中間に位置づけ可能な資料であろう。また碗状の杯身の調整が指頭ナデで丸味を持つこと、宮之腰遺跡のように口縁部を明瞭に内彎させないこと、底部形態等に地域色も認められる。6世紀後半から7世紀にかけて須恵器模倣杯身を除けば、当地域における土師器杯身類の唯一の器形となる碗状の杯の初源期は5世紀中葉の早い時期とみてよい。

4号堅穴出土品も7世紀前葉から中葉の器種組成を物語る良好な一括資料である。

#### 参 考 文 献

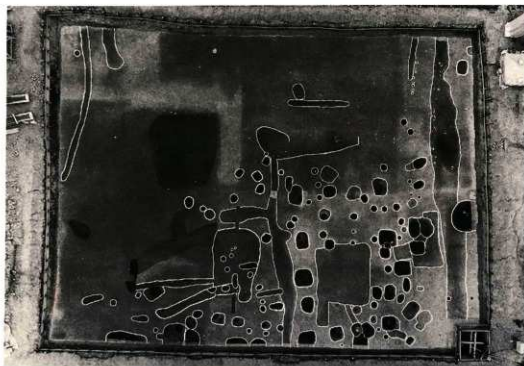
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 『坂尻遺跡…昭和63年度袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報一』
- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器—古代陶質土器—の編年』 静岡県考古学会
- 焼津市教育委員会 1982 『宮之腰遺跡』
- 増井義巳 1964 『宮之腰遺跡』 焼津市教育委員会
- 平野昌郎 1974 『遠江見性寺貝塚の研究』 磐田市教育委員会
- 川江秀孝 1980 「第2章 土器・土器の分類」『伊場遺跡発掘調査報告書第4冊 伊場遺跡遺物編2』 浜松市教育委員会
- 浜松市教育委員会 1987 『伊場遺跡発掘調査報告書第6冊 伊場遺跡遺物編4』
- 磐田市立郷土館編集発行 1982 『磐田市古墳時代遺跡地名表』

本発掘調査を実施するにあたり地主杉村忠一氏、ご家族のみなさまには大変お世話になった。約束した6月木になっても調査が終了せず、気を揉まれたことと思う。ただ、ただ、待って下さった。ここにまた一つの貴重な歴史資料が蓄積できたのは、杉村忠一氏をはじめご家族のみなさまの地域文化財に対する理解と見識の深さによるものと言っても過言ではない。文末ではありますがここに記して深く感謝の意を表します。

# 写真図版



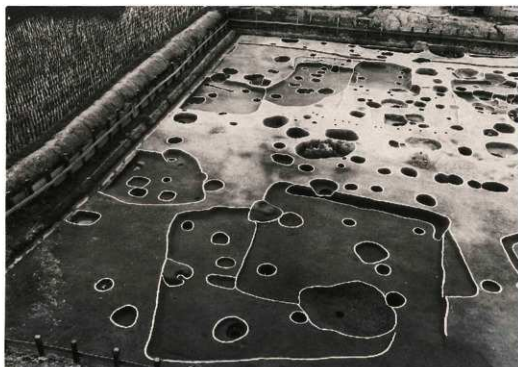
第1面完掘状況（東より）



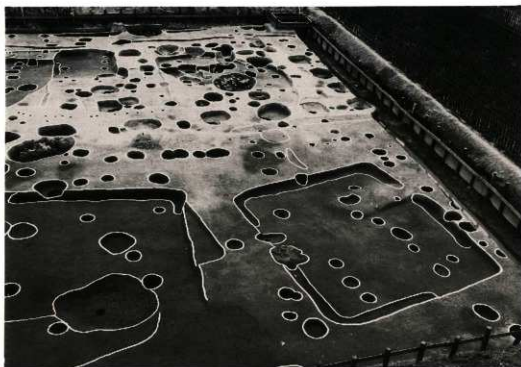
第2面完掘状況



第3面完掘状況（東より）



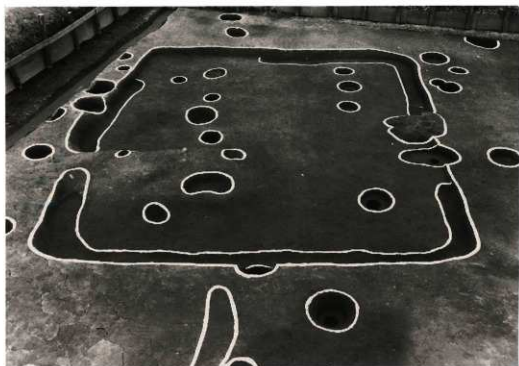
第3面北半完掘状況（西より）



第3面南半完掘状況（西より）



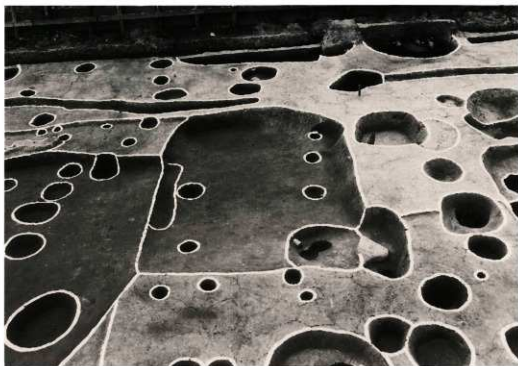
1・2号住居 2号竪穴（南東より）



3号住居 (東より)



4号住居 (南より)



5号住居（西より）



4号竪穴（北より）



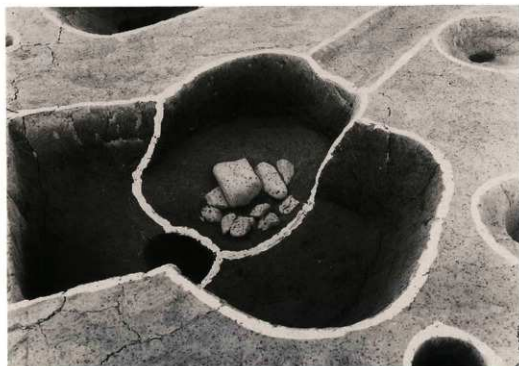
1号掘立 (北より)



2号掘立 1号溝 (北より)



1号掘立P62柱根検出状況 (東より)



1号掘立P65根固め磔検出状況 (東より)



5号竪穴 (北より)



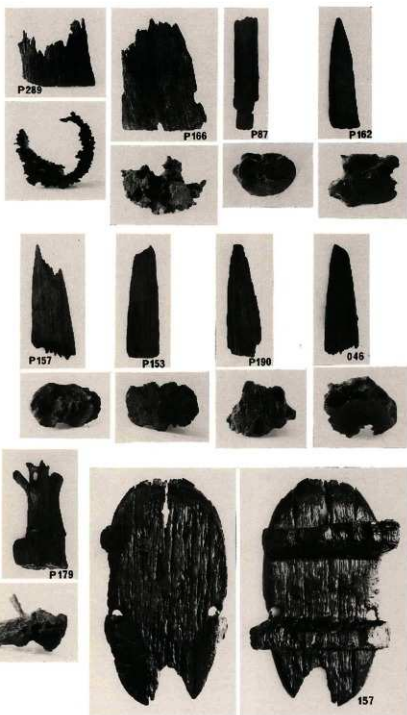
第1面小柱穴列 (北より)



第1面溝（北より）



1号井戸下駄出土状況



柱根礎板

## 坂 尻 遺 跡

—平成2年度メロンハウス建設に伴う

緊急発掘調査概報—

1991年 3 月30日

発行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中沢町1-1